曹植の文学研究

05H1083　　成田美宣

曹植(字子建、192 ～ 232)は、後漢の初平３年、当時38歳の曹操と卞氏との間に生まれた。彼の早熟な才能は、父・曹操を驚嘆させたが、同腹の兄・曹丕との跡目相続争いに敗れた。曹操の死後、曹丕が魏朝を建てる（220年）と、曹植は諸侯王として厳重な監視下に置かれた。頻繁な任地替えによって落ち着く暇もなく、兄弟・側近との死別や離別を繰り返し体験し、自身もまた死の影に怯えるなかで、多くの秀逸な作品を生み出した。

なかでも「白馬王彪に贈る」詩は、曹植の文学を代表する作品の一つである。黄初４年（223)、曹植は魏の都・洛陽に参内した。帰国にあたり、異母弟の曹彪と同行しようとしたが許されず、思いを詠んで彼に贈る。序文と詩の前半は、彪と帰路を共にできない憂憤の情を表白し、自らを中心とした叙景を主に描写する。その第３章にいう。

玄黄猶能進	玄黄るるも猶お能く進む
我思鬱以紆	我が思いは　鬱として以て紆たり
鬱紆将何念	鬱紆として　将た何をか念う
親愛在離居	親愛　離居に在り
本図相与偕	本相与に偕にせんと図りしに
中更不克俱	中ごろ俱にすること克わざるに更めらる
鴟梟鳴衡軛	鴟梟は　衡軛に鳴き
豺狼当路衢	豺狼は　路衢に当る
蒼蠅間白黒	蒼蠅は白を間えて黒からしめ
讒巧令親疏	讒巧は親をして疏ならしむ
欲還絶無蹊	還らんと欲するも　絶えて蹊無く
攬轡止踟蹰	轡を攬りて　止だ踟蹰す

【注】**○紆**　屈曲すること。**○将**　強意の助字。**○親愛**　兄弟を指す。白馬王だけに限らない。**○在離居**　在は、現在の状態をあらわす。『文選』巻29、「古詩十九首」其６に、「同心にして離居せば」とある。**○鴟梟鳴衡軛**　鴟梟はフクロウ、悪声をはなつ不吉な鳥で、奸悪や小人にたとえる。衡軛はクビキ、轅の前につけて牛馬をつなぐもの。本句は君側に奸悪が多いことをたとえる。**○豺狼**　豺はやまいぬ・おおかみ。鴟梟と同じく、奸悪な小人の比喩。**○蒼蠅間白黒**　『詩経』小雅「青蠅」に、「営営たる青蠅、樊(垣根)に止る」(王が好んで讒言を聞くので、詩人がそれを青蠅の飛びまわって物を汚すさまにたとえて戒めた)とあり、潔白な人を非難讒言して陥れることをいう。**○讒巧**　人を陥れるため、偽って口先うまく告げ口すること。

馬は疲れ果てているものの、それでもなお進むことはできる。しかし私の胸は憂いがわだかまり、ひらけない。憂いに閉ざされた私は、一体何を思うのだろう。それは、親愛な兄弟たちと隔てられてしまっていることだ。

私は初め君(白馬王)と道中を同じくしようと計画していたが、途中で同道してはならぬと命令が変更された。これというのも、フクロウのような小人が、帝の乗り物のクビキで悪声をはなち、ヤマイヌのような悪人たちが、行く道を邪魔しているのだ。蠅は白い物をよごして黒くするし、讒言と巧言は、親しい者を疎遠な関係にしてしまう。

私はもとへひき返したく思うが、すでに細い道すら全くなくなっている。むなしく馬のたづなを手にとって、行くに行けず、むなしくためらうのだ。

「蒼蠅間白黒」の句は、『詩経』小雅「青蠅」詩を踏まえて、君主（＝文帝曹丕)と讒せられた者（＝曹植)の関係を詠んでおり、序文にいう作詩の動機（同道を禁止された憂憤の情）を越えて、曹丕に対する曹植自身の心情が表出されている。贈る相手(白馬王)に直接関与しない心情の吐露は、作者と贈る相手との相互関係によって成立する贈答詩の、典型的な作詩法とは異なっている。このため、詩中の登場人物として予期されない第三者(ここでは曹丕)に対する憤りを詠んだ第３章が、ひときわ強烈に感じられてくる。曹植は贈答詩という形式を借りて自己の心情を表白する傾向があり、その対象は贈る相手に限定されないのである。

曹植は楽府詩の名手でもある。「白馬王彪に贈る」詩を詠んだ第３期（建安23～黄初7年［218～226］）には、多くの楽府詩が作られている。次に引く「美女篇」は、その代表作の一つである。長篇であるため、２段に分けて引く。

美女妖且閑　　美女は妖にして且つ閑なり
采桑岐路間　　桑を岐路の間に采る
柔条粉冉冉　　柔条　粉として冉冉たり
落葉何翩翩　　落葉　何ぞ翩翩たる
攘袖見素手　　袖を攘げて素手を見わせば
皓腕約金環　　皓腕　金環を約す
頭上金爵釵　　頭には金爵の釵を上し
腰佩翠琅玕　　腰には翠琅玕を佩ぶ
明珠交玉体　　明珠　玉体に交わり
珊瑚間木難　　珊瑚　木難に間わる
羅衣何飄飄　　羅衣　何ぞ飄飄たる
軽裾随風還　　軽裾　風に随いて還る
顧眄遺光彩　　顧眄すれば　光彩を遺り

長嘯気若蘭　　長嘯すれば　気　蘭の若(ごと)し
行徒用息駕　　行徒　用(もっ)て駕を息(やす)め
休者以忘餐　　休者　以て餐(さん)を忘る

【注】**○閑**　みやびやかなさま。**○柔条**　柔らかい枝。**○冉冉**　しなやかなさま。**○翩翩**　ひるがえるさま。**○琅玕**　玉に似た美しい石。**○木難**　『文選』巻27の李善注に引く『南越志』に、「金翅鳥の沫(つばき)より成る所の碧色の珠なり」とある。**○顧眄**　流し目で見ること。

あでやかで、みやびやかな美女が、分かれ道のところで桑の葉を摘んでいる。柔らかい枝は、あちこち入り乱れてしなやかに動き、落とす葉はひらひらと舞う。

美女が袖を掲げると素(しろ)い手が現れ、皓(しろ)い腕には金の腕輪をはめている。頭には金の雀の形をしたかんざし、腰には翠色の琅玕をつけ、真珠が玉のような美しい体にまつわり、珊瑚が木難に入り混じってきらめく。

うす絹の衣はひらひらと揺れ動き、軽やかな裾は風のままにくるくると舞う。美女の流し目は美しい輝きにあふれ、長く吹く口笛は蘭の香りを思わせる。道行く人は彼女に見とれて車をとめ、休息する人は食事を忘れて美女を見る。

この前段は、桑の葉を摘む美女の姿を、衣服・装飾品の面から細かく描写し、表現は多彩である。

借問女安居　借問(しゃもん)す　女(なんじ)は安(いず)くにか居(お)る
乃在城南端　乃ち城の南端に在り
青楼臨大路　青楼は　大路に臨み
高門結重関　高門は　重関を結ぶと
容華耀朝日　容華　朝日に耀く
誰不希令顔　誰か　令顔を希(ねが)わざらん
媒氏何所営　媒氏は　何の営む所ぞ
玉帛不時安　玉帛　時に安んぜず
佳人慕高義　佳人は　高義を慕うも
求賢良独難　賢を求むること　良(まこと)に独り難し
衆人徒嗷嗷　衆人は　徒らに嗷嗷(ごうごう)たり
安知彼所観　安(いずく)んぞ彼の観る所を知らん
盛年処房室　盛年　房室に処(お)り
中夜起長歎　中夜　起きて長歎す

【注】**○令顔**　美しく清らかな顔。**○媒氏**　仲人。**○高義**　節義の高い人。**○嗷嗷**　がやがや騒ぐさま。重言。

美女に「あなたはどこにお住まいですか」と訊ねると、なんとこう答えた、「城(まち)の正南門あたりの、大通りに面する青楼に居ります。高い門があり、二重に門をしております」と。華やかな容貌は、朝日に耀く。この美貌の人を望まない者はいないだろう。仲人は一体何をしているのか。結納の玉や絹がしかるべき時に届けられていない。

美女は高い節義の人を慕っているが、立派な人物を求めるのは、本当に難しいことなのだ。多くの人たちはやたらと騒いでいるが、どうして美女の胸中を知り得よう。

美女は娘盛りの年頃を、奥まった部屋のなかで過ごし、夜中に起き上がっては、長いため息をもらしている。

後段は、良き夫を求めようとする美女の心情を歌っている。黄節『曹子建詩注』に引く元・劉履の説にいう、「曹植の志は、君主を輔(たす)けて国の乱れを正し、功を立てて名を伝えることにあったが、遂げることができなかった。諸侯王に封ぜられたが、心中ではなお君主に仕えていないと見なしていた。だから、美女に託して怨みながらも慕う気持ちをこめ、美女の妖・閑・皓・素を自身の才質の美にたとえ、服飾の美しさを自身の徳のすばらしさにたとえた」と。曹植は終生中央の政治に参与することを熱望した。本詩には、王族に対する過酷な冷遇が続くなか、不遇のまま人生を終えることへの不安と悲しみがこめられている。

前段における美女の精細な描写は、読み手に明瞭なイメージを与え、後段のなかでその心情を読者により深く理解させる。かくして美女に託された曹植の心情が、おのずから表出するのである。

山口為広「曹植 - その人と文学 - 」には、曹植の楽府作品は、彼自身の心情の切実な表現の具であったと指摘するが、充分首肯できる説である。自己の心情を作中の主人公に託して、間接かつ暗示的に表現できるのは、様式として物語的性格を持ち、しかも曹植自身の高い描写力を発揮できる楽府詩によって可能だったといえるだろう。

曹植の作品は、南朝・梁の鍾嶸が『詩品』のなかで、「嗟乎(ああ)、陳思の文章に於けるや、人倫の周(公)・孔(子)有り、鱗羽の竜鳳有り、音楽の琴笙有り、女工の黼黻(ほふつ)(礼服の刺繍)有るに譬う」と評し、梁の昭明太子蕭統撰『文選』(530 年すぎの編纂)のなかに、賦1首、詩25首、文章6首が採録されている(前掲の「白馬王彪に贈る」「美女篇」を含む)ことからも、文学的評価の高さを充分推測できよう。その一因は、曹植が波乱に富む不遇な生涯のなかで、政治参画への熱意を持続し、悲憤の情を詩文のなかに誠実に表白し続けた結果であった、と評せるであろう。

※卒論は、第１章　曹植の生涯と詩作、第２章　「洛神賦考」、第３章　贈答詩考から成るが、ここでは第１章から一部を抜粋して記した。